

三 北斗だより

令和5年度 第6号
(9月1日発行)
愛媛県立今治北高等学校

「絶対無理」を覆す

生徒課長 重澤 和史

東京パラリンピックの閉会式グランドフィナーレで『What a Wonderful World』の感動的なピアノ演奏をした西川悟平さんのお話を聞く機会があった。その中で、印象に残ったエピソードを御紹介したいと思う。

西川さんはこれまでに3回、「それは絶対無理です。不可能です」と言われたことがあるという。最初は15歳の時。ピアノ教室に通い始めて初めて熱中できるものを見つけた思いがして、ピアノの先生に、「自分は将来音楽大学に行きたい」と話したら、「それは絶対無理」と言われたそう。ピアノ専攻で音楽大学に進むには、2～3歳くらいでピアノを弾き始め、一日何時間も練習して初めて行くのが常識だから、15歳でバイエルを弾いている状態ではとても無理、ということなのだ。しかし、西川さんは、高名な演奏家のショパン演奏を聴き、自分はバイエルの練習から始め、数年後、音楽大学に進むことができた。これが絶対無理を覆したスタートだ。

2回目の「絶対無理、絶対不可能」は、音楽大学を卒業して数年後のことだ。生活費を捻出するために和菓子屋で働いていたところ、アメリカから来日する著名なピアニストの前座で演奏する機会があった。そのピアニストに「君は技術はないが、伝えたいものがたくさんあるのだね。それをどうすれば伝わるようになるか教えてあげるよ。ニューヨークに来るなら連絡するように」と言われた。ニューヨークに行こうと思ったら、周りの人に「そんなうまい話はあるはずない。絶対無理。ニューヨークで成功するなんて不可能」と言われたのだ。それでも西川さんはニューヨークに行き、学び、カーネギーホールで演奏するようになる。

しかし、そんな大成功のある日、突然指が曲がり動かなくなるという状況に陥るのだ。大病院など何軒も回り『局所性ジストニア』という難病指定を受け、「演奏はプロとしてはもちろん、趣味としてもできない。不可能。絶対無理」と言われたそう。そんな時、友達から誘われて訪れた幼稚園で、子どもたちの前で、1本指で演奏した「ド・ド・ソ・ソ・ラ・ラ・ソ」の『きらきら星』を演奏したことがすべてを変えた。子どもたちは、西川さんの曲がった指など全く気に留めず、演奏を楽しんで踊ったりしているのだ。それを見て西川さんは、動かすことのできる指で演奏をしようと決心した。これが今、西川さんが機能が残る7本の指でプロとして演奏を続けられる理由だ。

「絶対無理、不可能」。そんな言葉を私たちも何度も言われたり、口にしたりする。「無理」と、年長者、教師、評論家や親などから発せられる言葉は、強いレッテル貼りになり、その人の未来や可能性を封印してしまう。今回西川さんのお話を聞いて、そのレッテルをはがすことの素晴らしさを感じるとともに、教師として、生徒たちの可能性を封じ込めるような言葉を発していないだろうか、強く自戒した次第だ。

帰宅して、改めてスマホで検索し、西川さん演奏の『この素晴らしき世界 (What a Wonderful World)』を聴いてみた。当時のベトナム戦争の絶望から生まれた、何気ない風景や人々の営みの中に喜びを見いだしていく曲だが、すごく元気と勇気をもらった気がする。

※お気付きの点や、御意見・御質問などありましたら、下に記入の上、お子さんを通じて担任まで御提出ください。

今治北高校の日々の様子をホームページに掲載しています。「今北日記」「生徒の活動」「部活動」など、ぜひ御覧ください。

今治北高等学校 学校公式サイト <https://imabarikita-h.esnet.ed.jp>

----- 切 り 取 り -----
年 組 名前